令和2年度第1回北海道総合教育会議 議事録

1 日時

令和3年1月21日（木）午後1時30分開会

2 場所

WEB開催

3 構成員の出席状況

（1）出席

鈴木知事、小玉教育長、橋場委員、山本委員、青山委員、渡辺委員、川端委員

4 会議に出席した学識経験を有する者

NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム 理事長 新保 元康 氏

5 議事等

（1）北海道総合教育会議の運営に関する要綱等の改正について

（2）With コロナ時代の学びの保障について

6 議事録

別紙のとおり

1．開会

○事務局（倉本総合政策部長）

それでは定刻でございますので、ただ今から令和2年度第1回北海道総合教育会議を開催いたします。私は総合政策部長の倉本でございます。どうぞよろしくお願いいたします。開会にあたりまして、知事からご挨拶を申し上げます。

○鈴木知事

北海道知事の鈴木でございます。北海道総合教育会議の開催にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。教育委員の皆様そして本日ご講演をいただきます、NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムの新保理事長におかれましては、大変お忙しい中、当会議にご参加をいただきましたことに改めて深く感謝を申し上げます。今回、北海道総合教育会議として初めての試みでございますけれども、コロナ禍におきまして、WEB開催とさせていただいたところでございます。皆様には、様々、ご対応いただいたことに対して、重ねて感謝を申し上げます。また、今回から新たに渡辺委員、川端委員がご参加をいただいているところでございます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

さて、昨年を振り返りますと、何といっても新型コロナウイルス感染症が感染拡大いたしまして、教育現場に大きな影響を及ぼした1年でございました。特に2月に実施をいたしました小中学校の一斉休業、その後に結果として小中高の全国での一斉休業という形になりまして、長期にわたることとなりましたが、学校関係者の皆様、並びに児童生徒、保護者の皆様、大変多くのご苦労をおかけしたわけであります。この間、教職員の方々はもちろんといたしまして、ご家庭や地域、そして教育委員会の皆様におかれましては、子ども達の学びを止めないために、分散登校をはじめとする様々な対策に取り組んでいただいたところでございます。皆様に対して改めて感謝を申し上げます。

本日は「Withコロナ時代の学びの保障」をテーマといたしまして、教育現場において密を避ける必要性と、人と人との触れ合いや交わりをどのように両立をしていくのかということ、また、地域創生や産業の担い手となる人材の育成の観点から、今後の教育環境の充実に向けまして、子どもたちの「学び」をいかに継続し、保障していくのかということについて、意見交換をさせていただきたいと考えております。

教育委員の皆様、そして新保理事長には、本道教育の一層の充実とWithコロナ時代における課題について、忌憚のないご発言をお願いしたいと思っております。簡単ではございますけれども、私からの冒頭のご挨拶に代えさせていただきたいと思います。本日は皆様よろしくお願い申し上げます。

○事務局（倉本総合政策部長）

ありがとうございました。本日の議題は「Withコロナ時代の学びの保障」とさせていただいております。新型コロナウイルス感染症によりまして、当然のように日常生活に存在していた教育活動や入学式、卒業式、あるいは運動会、修学旅行など学校行事や部活動などが従来同様には、なかなか実施しにくくなっているところでございます。新たな工夫を行うなど、ポストコロナの新しい時代

も見据えまして、子ども達の学びの保障が求められております。本日は、会議を構成する知事と教育委員会の皆様に加えまして、NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムの新保理事長にご参加をいただいております。後ほど専門的な見地からご講演をいただきまして、児童・生徒の学びの保障の推進に向けた議論を深めて参りたいと考えております。

それでは会議に入ります前に資料を確認させていただきます。会議次第、出席者名簿の他に資料1といたしまして「北海道総合教育会議の運営に関する要綱改正案」、「北海道総合教育会議の傍聴に関する要領改正案」、運営要綱及び傍聴要領の新旧対照表、それから資料2－1といたしまして「「北海道Society5.0」の実現に向けた取組について」、資料2－2として「学びの保障に向けた道教委の取組について」、そして、資料3としまして新保理事長のご講演資料でございますが、「北海道Society5.0の実現に向けた、学校の日常改善への道」。お手元にございますでしょうか。それでは議事に入らせていただきます。これからの進行は議長として鈴木知事にお願いします。

2. 議事等

○鈴木知事

それでは議長を務めさせていただきます、よろしくお願いいたします。最初に、まず議事の1番目でございますけれども、当会議の運営要綱と傍聴要領の改正につきまして、お諮りをさせていただきたいと思います。昨年4月の道庁の機構改正に伴いまして、条文中の事務局などの組織名称を資料1のとおり改正をしたいという内容となっておりますので、この案のとおりご承認いただければと考えているところでございます。皆様よろしいでしょうか。

（「結構です」との発言あり）

ありがとうございます。ご了承をいただきましたので、そのように改正をさせていただきます。

それでは続きまして、本日は「Withコロナ時代の学びの保障」を議題に協議をしてまいりたいと思います。まず、道と道教委の双方から関連する取組状況等についてご報告をさせていただきまして、情報共有を図らせていただきたいと思います。初めに、「北海道Society5.0」の実現に向けた取組について総合政策部情報統計局長の千葉からご報告をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

○事務局（千葉情報統計局長）

情報統計局長の千葉です。よろしくお願いいたします。

それでは資料2－1「北海道Society5.0」の実現に向けた取組についての1ページ目をご覧いただけますでしょうか。初めに「Society5.0」という言葉の定義なのですが、平成28年に国が示した目指すべき新たな社会の姿、形でありまして、私たちの暮らしは狩猟社会であるSociety1.0から技術の進歩などによりまして農耕、工業、情報社会と歩んできたところですが、Society5.0は、その次となる新たな社会の姿、形となります。イメージですが、右の図をご覧ください。私たちが住む・暮らす現実社会、フィジカル空間、ここにおいて、ドローンやロボットの活用、自動走行トラクターなどといった取組を一層進めていくと、更にそれらを全てネットワークに繋げて、そこから得られるデ

ータをサイバー空間（インターネットなどになりますが、）によって蓄積、分析し、その結果を現実社会に還元していくことで、より便利で安全安心な社会を目指すという取組です。そして北海道Society5.0ですが、ICTやAIなどの未来技術の実装とデータの活用により実現する概ね10年後の北海道の未来社会となります。

2ページ目をご覧ください。取組の背景になります。北海道は人口減少や高齢化、広域分散型の社会であることなどを背景に、医療や教育の維持・確保といった課題、また、今般の新型コロナウイルスの感染拡大など様々な課題に直面しています。一方で、ICTやAI、ドローンといった技術の活用やインターネットの利用拡大など新しい技術の進展が著しい状況にあります。こうした中、道といたしましては、全国に先駆けてSociety5.0を実現することで、地域の課題の解決や活性化、更にはコロナ後の新たな生活様式の提案・提供などに繋げていきたいと考え、Society5.0の取組を進めています。

3ページ目をご覧ください。未来技術の活用状況になります。道内におきましては、暮らしや産業など様々な場面において、AIやIoT、ドローン、自動運転などの実用化に向けた実証実験が各地で進められています。道といたしましては、こうした取組を全道に広く展開するとともに、早期に実用化を図ることで、北海道Society5.0の実現を加速したいと考えております。

4ページ目をご覧ください。道の取組になります。道では昨年度、北海道の有識者による懇談会を設置しまして、未来技術で実現する概ね10年後の北海道の未来社会について目指す姿をご議論いただくとともに、その実現のロードマップとなる北海道Society5.0構想を策定いただきました。そして今年度は、この構想の実現に向けまして、道としてのアクションプランとなる北海道Society5.0推進計画の策定作業を年度末に向けて進めているところであります。

5ページ目をご覧ください。現在策定中の推進計画の概要になります。昨年度の構想で示されました10年後の北海道の未来社会の実現に向けて、その中間年となる2025年までの5年間の計画としております。内容といたしましては、①暮らし、②産業など5つの柱立てとなっておりまして、本日のテーマである教育につきましては、暮らしの中で重要なテーマの一つとして設定しております。

6ページ目をご覧ください。推進計画における教育分野の取組ですが、まず10年後の未来社会の姿といたしまして、通信回線の整備などにより遠隔授業の手法が確立し、子ども達に最適な学習が可能となっていること、また通信によるリカレント教育などが普及していることを掲げまして、そのために5年間の取組目標といたしましては、ICTを活用し、創造性を育む学習を実現できる環境の充実、また、未来技術の活用を通じた北海道の未来を担う人材育成の取組強化、この2つを定めまして、その実現に向け下に記載のとおり関連施策を整理しています。また、左下黄色い枠囲みにありますが、ICT活用の基盤となる光ファイバにつきまして、今年度、国の補正予算が大幅に拡充されたのですが、これを活用いたしまして、道内の104市町村で整備が計画されております。これにより、来年度末までには道内全域で通信環境が整う見込みとなっております。説明は以上でございます。

〇鈴木知事

千葉局長ありがとうございました。続きまして、小玉教育長から学びの保障に向けた道教委の取組についてご報告いただければと思います。よろしくお願いいたします。

〇小玉教育長

それでは私の方から説明いたします。Society5.0はデジタル技術を駆使した産業・生活・学習などのトランスフォームだと思いますが、道教委では、Student Firstで ICTを最適化し、それに付加価値をプラスするという考え方で取り組んでおります。

まず新型コロナウイルス感染症対策を契機とした道教委の学びの保障に向けた取組の全体像についてご説明いたします。各学校の感染症対策は、文部科学省から示されている衛生管理マニュアル、学校の新しい生活様式、これに基づきまして家庭・学校・地域において様々な対策がとられております。道教委としては、「学びを止めない」「心が近づく」を合言葉に加配教員や学習指導員の配置による、きめ細やかな指導、ICTを活用した授業や遠隔配信、子ども達の心や体のケア、部活動の大会中止に伴います代替企画「もうひとつのクライマクス」事業など、新しい知見をもとに対策をアップデートしながら、多面的に取り組んでおります。

次に、前倒しとなったGIGAスクール構想や、先ほど千葉局長からご説明のありました、Society5.0推進計画の教育分野の施策にも掲げられておりますが、ICTを活用した学びのご紹介をいたします。これ（資料3ページ）は中学校におけるZoomを活用したものですが、左側が臨時休業中の学級ミーティングの様子で、右側が家庭学習における双方向学習で教師と生徒が機器操作のノウハウを学んでいる様子でございます。このページ（資料4ページ）は高校におけるクラウドサービスを活用した授業風景です。左は、一人一人がクラウド上の教材を確認し、教師と双方向で学習を進める一斉学習の様子。右側は、データの共有機能を使ってグループ内意見をリアルタイムに共有し、一体的に学習を進める協働学習の様子です。これらによりまして、教師が生徒一人一人の反応ですとか、理解度、つまずきをスピーディーに把握でき、また、生徒が相互に多様な意見にも即時に触れることが可能になります。私もいくつか授業参観いたしましたが、リモート、ディスタンスを確保するという利点だけでなく、主体性・対話性を伸ばすのにもICT活用授業は非常に適しているのが納得できました。

続きまして、道教委ではGIGAスクール構想を実りあるものとして牽引するため、独自のプロジェクトをいくつか進めております。本日は、その中から四つの取組についてご説明いたします。

まず、知恵と技が集まるポータルサイト。小中学校では4月から1人1台のパソコンを活用した学習が本格的にスタートいたします。新しいデバイスを駆使して教育活動を行うためには、教員のスキルを高めることが不可欠となっています。このため、教員が端末やクラウドを活用して授業を行う際のヒント、つまりTipsを道教委のホームページに掲載しております。既に400を超える実践方法が蓄積されておりまして、市町村教育委員会、各学校で活用されております。

次は、「家庭と近づく」というコンセプトでございますが、オンライン学習導入モデル事業を進めております。昨年春の一斉臨時休業中にオンラインを活用した学習支援ができた学校は、中学校

でも15%と非常に少ない状況にございました。このため、オンライン学習機器の利用ノウハウと、効果的な指導方法を検証し、全道に広める事業を進めています。この事業によりまして、教員の指導意欲と生徒の家庭での学習意欲が向上するなどの効果が見られております。

次は、企業とコミュニティ、みんなで支えるための取組、「まなLabo事業」と呼んでいるプロジェクトでございます。感染したり、濃厚接触者になりますと、最低でも2週間の自宅学習が求められます。その状況に対応するための機器を貸し出し、学びを止めない体制を確保することとしております。この事業は、サツドラホールディングス株式会社のグループ企業であります、株式会社シーラクンス様と連携協定を結び、同社からWiFiルーターをご提供いただくことで実現しております。

最後に、多様性が輝くという趣旨で、「Colorful Sprout」というプロジェクトを進めております。ICTを活用して障がいのある子どもの才能を開花させようという取組です。雪ミク芸術祭では、障がいのある子ども達が作成した雪ミクのイラスト、ぬり絵を募集し、作品を公開することとしております。またばーちゃる文化祭は、特別支援学校の学習成果などをバーチャルキャラクターを動かしてYouTubeで紹介いたします。こうした、アートなどの多彩な可能性を引き出したり、身体的なハンディや表現・創造性の制約を難なく乗り越えてしまうのが、Society5.0の醍醐味だと考えております。

以上四つの取組についてご説明いたしましたが、この度の新型コロナウイルス感染症の広まりにより、ICTを活用した教育の必要性、有効性とも日々高まりを見せています。道教委といたしましては、こうしたICTを効果的に活用し、個の学びを伸ばす一方、今年は地域探究ですとか、学際融合といった集団的・協働的な学び、すなわち、地域と学校の協働の推進にも力を入れていきたいと考えております。以上で私からの説明を終わります。

○鈴木知事

小玉教育長ありがとうございました。次に、NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムの新保理事長からご講演をいただきたいと思います。ご講演に先立ちまして、事務局から新保理事長の略歴について、ご紹介させていただきます。よろしくお願いいたします。

○事務局（笹森総合教育推進課長）

本日ご講演いただきます新保理事長におかれましては、小樽市のご出身で、昭和57年（1982年）に北海道教育大学札幌分校をご卒業された後、札幌市立の小学校などでの勤務を経られまして、札幌市立山の手南小学校や屯田小学校などの校長をご歴任されるなど、長年にわたり、教育現場の第一線でご活躍をされまして、平成31年（2019年）3月に定年退職をされました。退職後は、文部科学省のICT活用教育アドバイザーや、道教委の学校力向上に関する総合実践事業アドバイザーなど、国や北海道の教育施策に関する各種委員を務められまして、また、NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムの理事長としてもご活躍中でして、北海道の魅力や地理、歴史、文化、産業などを「ほっかいどう学」として、子どもから大人までが幅広く学び、地域に関する理解や愛着を深めていく活動にも、精力的に取り組まれております。本日は、新保理事長から貴重なお話をい

ただきまして、議論を深めてまいりたいと考えておりますので、限られた時間ではございますが、よろしくお願い申し上げます。以上です。

〇鈴木知事

ありがとうございます。それでは早速でございますけれども、新保理事長、よろしくお願い申し上げます。

〇新保理事長

皆様どうぞよろしくお願いいたします。今日はお声がけをいただきまして、大変光栄に存じます。「北海道Society5.0実現に向けた、学校の日常改善への道」についてお話をさせていただきます。

大変丁寧なご紹介をいただきました。今は定年退職をして、このような（資料3ページ）お仕事をさせていただいております。小樽生まれでございます。最後の勤務校は札幌市立屯田小学校でございました。今は文部科学省や道教委のお手伝いもさせていただいております。

私の今の一番大きなお仕事は、「ほっかいどう学」の推進です。これ（資料4ページ）は、平成28年の北海道広告業協会のコンテストで最優秀をとった広告です。「日本は小さい。北海道は大きい。」は、素晴らしいコピーだと思います。日本も大きな国ですが、何かこの言葉には惹かれるものがあります。実際、北海道の中には、他の都府県が、私の計算によれば、14入る。我が北海道はそんな大きな自治体であるということです。そして、世界が憧れる魅力がたくさんありますし、また同時に、全国より10年早く進んでいる人口減少という大きな課題も抱えています。この本当の北海道のことを知り、考え、語り、生きるために、「ほっかいどう学」が必要なのではないか、もっと子ども達に、北海道のことを勉強して欲しいなと願っています。

もう一つのお仕事は、今日のお話にも関係してきますが、ICTを活用した学校経営について、サポートやアドバイスをするお仕事もしております。私は校長として山の手南小、幌西小、発寒西小、屯田小の4校でICTを活用した学校経営を進めてまいりました。このとき実践したことを基に、アドバイスをさせていただいています。ICTを活用した学校経営ができたのは、札幌市のICT関係のインフラの充実があります。インフラが充実しているといろいろな可能性が出てくると感じております。ちなみに幌西小には、同窓の先輩としてオリンピアンの川端委員の写真も掲示されていました。

今日、お話したいことのまとめを先にお話します（資料7ページ）。「Withコロナ時代の北海道の課題」、これは私が申し述べる必要はないことかと思いますが、やはり、感染症のリスクというのは、これからもずっと継続するのかなと思います。特に北海道の場合、住宅、学校も気密性が高い環境です。それから、やはり人口減少の問題が大きい。特に働き手の減少は、学校にとっても大きな問題で、子どもの教育にも大きな影響を与えると考えております。また、広域分散型の社会、これも知事がよくお話なさることでございますが、やはりこれはわたしたち北海道の困難であり、また魅力でもあるのですが、これをよく知り、解決していくということも必要かと思います。

こうした課題を解決するために、最も役に立ちそうなのが、やはりデジタル化です。先ほどご説明

のあったSociety5.0実現に向けた取組です。それは学校のデジタルトランスフォーメーション、それはすなわちGIGAスクールとなります。これは広い北海道だからこそ、恩恵が大きいものだと考えます。それを学校の日常に繋げていくということが大事です。文房具のように、日常的にパソコン「も」活用するということになろうかと思います。例えて言いますと、車が我が家に来ても、車庫に入れたままでは、生活は改善しません。パソコンも同じだと思います。ICTを学校に入れただけでは改善しませんので、それをどうやって日常的に使っていくかということが、これからの大きな課題ではないかなというふうに感じております。

もう皆様ご存知のこととは思いますが、GIGAスクール構想について簡単におさらいをします。令和元年12月19日に、文部科学大臣よりメッセージが出されまして、GIGAスクール構想がスタートしました（資料9ページ）。ここには、「Society5.0時代に生きる子供たちにとって、PC端末は鉛筆やノートと並ぶマストアイテムである。」「学校が、時代に取り残され、世界からも遅れたままではいられません。」とあります。1人1台端末は、令和の学校の標準であるということです。それが「多様な子供たちを誰一人取り残すことのない公正に個別最適化された学びや創造性を育む学びに寄与する。」という、大変 良いことが書いてあります。もちろん「特別な支援が必要な子供たちの可能性も大きく広げるもの」と書かれており、これは大事なポイントだと思います。さらに、学校の情報化は働き方改革にも繋がるということも、書かれています。

GIGAスクールが求められる根拠として大きな話題になっているのがこのOECDの調査（資料10ページ）です。「学校でICTを活用しているか」ということを調べたら、国語の時間、OECDの諸国は、約半分の国は、デジタル機器を使っている。ところが、日本は、10%程度でした。数学も理科も非常に差がありました。さらに、学校から帰った放課後、子ども達はICTを使って学んでいるだろうかという調査もありました。「放課後、コンピューターを使って宿題をする。」のは、OECDの平均は22%。日本は3%でした。「学校の勉強のために、インターネットで調べる。」OECDは23%。日本は6%。一方、「ネットでチャットをする。」のは、OECDは67%に対して、日本の子どもは87%。更に「1人用ゲームで遊ぶ。」OECDは26.7%ですが、日本は、半分、47.7%。つまり、日本の子どもは、ICTは「学び」に使わず、「遊び」に使っているのではないかという、非常に心配な状況が明らかになったのです。Society5.0時代に向けて、ますますグローバルな競争が想像されるわけですが、このような状況で対応できるのだろうか。これがGIGAスクール構想の背景の一番大きなものだと思います。

もう一つ、人口減少は非常に大きな問題があります。皆様ご案内のとおり、（資料11ページ）日本の人口はもう2008年から減り始め、既に12、3年になります。北海道は、更にこの10年前から減少が始まっています。これは、本当に大変な困難、課題です。更に、生産年齢人口、つまり15歳以上65歳未満の稼ぎ、消費し、納税する働き手の世代が、ぐんぐん減り続けている。既に1千万人以上減っているというお話も聞いています。教員も不足しています。その中で、教育の質を維持し、更に高めていくにはどうしたらいいかと。それには、やはり教育のデジタルトランスフォーメーションが欠かせないということだと考えています。

もう一つの背景があります。これ（資料12ページ）は文部科学省のサイトからとったものでござ

いますけれども、「学校」という言葉は、訳しますと、「スクール」というふうに言われますが、これは実は中身が違うのです。私はアメリカの学校を20校くらい見ましたがこれは実感があります。

日本の「学校」は、このように非常に大きな学校です。教科の勉強もしますし、道徳、特活、さらに給食の指導、掃除の指導も学校で行います。体育、音楽、芸術の指導、それから何より部活もやる。これを全部、日本の学校はやっています。

ところが、諸外国の「スクール」は教科の勉強。つまり、国語や社会や算数や理科という学習がほとんどであるということです。

日本の学校は、生徒指導もします。私たちの年代で言いますと、「金八先生」などのイメージが湧いてきます。子ども達の生活、時には家族の相談にまでのるという、日本の先生達の奮闘があります。これは、私どもの国の教育の素晴らしいところです。一方で、そろそろ限界ではないのかと言われています。実際、病気がちな先生方も多いですし、辞めていく先生もいる。そういう中でどうしたらいいのだろうか。デジタルを活用して、少し仕事を効率良くしていくということも重要なことだということがGIGAスクールの背景だと思います。

GIGAスクール構想を簡単にまとめました（資料13ページ）。1人1台のパソコンを用意をする。そして、高速ネットワークの整備。さらに、クラウドサービスを利用するということになります。いずれはこれによってAIなどの活用もできるようになる可能性があります。それによって、令和の学びのスタンダードを実現し、働き方改革にも繋がる。これは勤務状況の改善だけではなくて、教育の質の向上もするということです。これらがコロナ禍で一気に、令和2年度中に整備することに前倒しになりました。

ここから実際の様子をご覧いただきたいと思います（資料14ページ）。これは、2014年に実験的に行ったものです。このように1人1台のパソコンで勉強しました。この写真をよく見ていただければわかると思いますが、ここに、ノートも教科書も用意してあります。これらもちゃんと使うということです。更に、鉛筆などの学習用具もきちんと用意されております。紙もデジタルも使うハイブリットと言われています。パソコンもいつでも使いたい時に使うという環境、これがGIGAスクールということになります。自分の学習の進度に応じて、例えばドリルなどを解いていくことができます。そうしますと、すいすいわかっていく子は、どんどん難しい問題にも挑戦できます。それからちょっと勉強が苦手なお子さんもいるわけです。理解に時間がかかる場合には、その子に、先生がついて、個別に指導することもできる。こういうことで、よりわかりやすくなり、先生方も余裕を持って対応できるようになるということです。もちろん、子どもも嬉しい。そういう個別指導の充実が期待されています。

また、これは（資料18ページ）社会科です。武士の館の絵をデジタル教科書で大きくして見て、武士の館の特徴について自分の気が付いたことを、書き込みます。この時、デジタルのいい所は、書き込んだり、消したり、いろいろなトライアルができることです。また、みんなが書いた意見を見ることもできます。このように拡大して、「私はこう考えました。皆さんどうですか」という学び合いもとてもしやすくなります。1人1台の環境になりましても、このような大きなテレビ、或いはプロジェクターでの拡大した授業、これはますます重要になります。

GIGAスクール構想の可能性をまとめます（資料19ページ）。「個別最適な教育の実現」、これ

は今お話したとおりです。理解度に応じた指導だけではなく、自分の問題意識に応じて、「調べたいな」と思ったことを更に深く調べるという学習もできるようになります。

それから、「学校外での学びの支援」、これはWithコロナ時代、本当に大事になります。例えば、不登校等のことで困っている子ども達に、おうちにいてもリモートで勉強ができるように支援することができます。また、感染症というのは、この後もあると思いますが、それでも学びを止めないことが可能となります。

そして「学び合う環境」の充実です。日本人は手を挙げるのがちょっと恥ずかしいというところがあります。子どももそうです。手を挙げなくても意見を出しやすいというのは、このパソコンを使った授業の良いところではないでしょうか。

更に、先生方にとっては働き方改革に繋がる可能性があります。ICTで、子どもの学習状況が把握しやすくなりますし、サポートしやすくなるので、非常に理解が進みます。それから授業準備も負担軽減の可能性が大きくあります。ICTを活用して魅力的な職業になると教員の採用倍率も更に上がるかもしれません。「学校の先生になりたいな」「なんかスマートで、とてもいい仕事だよ」というふうに、若い人達に思って欲しいなと思っております。

更に、GIGAスクールは、北海道にはより大きな可能性があります（資料20ページ）。厳冬期、私たちは最高気温が零下の中で、何ヵ月も過ごします。吹雪やインフルエンザでの休校の時にも、1人1台があれば、学習を止めないことができる。それは北海道にとって大きなメリットだと思います。それから北海道ならではの豊かな学びを創造する。私は移住者も増えることにつながるのではないかと期待をしています。例えば、小規模校が北海道の場合約半数あります。GIGAが実現すれば、オンラインで大きな学校の子どもと小さな学校の子どもが一緒に学ぶことも可能になります。ネットワーク上ではいろいろな良い教育サービスが提供されています。そういう教育サービスを放課後、公営塾のような形で採用することもできるかと思います。また1人1台で効率的に学ぶことで余裕の時間を産み、北海道のこの自然体験学習をたっぷり行うことも大事だと思います。

更に、これらによって学力の向上も期待できます。教師の研修も、今までは集まるというのが大変でしたが、オンライン研修の活用もできます。集まる研修の良さ、それから、遠隔で行う良さ、両方あろうかと思います。このようなことによって教師力を向上させることが期待されます。最後に、ほっかいどう学を書かせていただきました。デジタルコンテンツの整備により、北海道のことをより深く学ぶ学習もできるようになるのではないかと思います。

これらを実現するために、少し心配なこともあります（資料22ページ）。一つは、情報化の必要性に対して、教師も保護者も社会も理解がまだ不十分かなという気がします。今までの方法を変えたくないなという気持ちもあると思います。それから、Withコロナ時代の学びが止まってしまったらどうしようという心配です。「文鎮化」と一般的に言われているのですが、もしパソコンが使われないで、単なる「文鎮」のようになってしまったら、これは大変です。ICTというのは、この後もどんどん進化します。今回GIGAスクールで大きな予算を頂戴していますけれども、次に繋がるためには、やはり実際に使われて、これは良いことだということが皆さんにご理解いただくことが必要です。この辺も心配であるところです。ここをみんなで超えていかなければならない。

例えば、これ（資料23ページ）は実例なのですが、ICTが学校に入ってきた時に、ちょっと残念なことが起きることがあります。デジタル機器を大事にするあまりに、「壊れたらどうしよう」と心配になり、結局カバーをかけて使われないということもありました。これ（資料24ページ）もよくある光景なのですが、これでは「はみ出す」「引っかける」「落ちる」ということになります。やはり、ICT周辺の環境がしっかりしていないと使えないということです。

これらを超えて行くには、次の様な対応が必要です（資料25ページ）。まず、インフラ整備です。そして、GIGAスクールの意味と日常的にICTを活用することの意味を理解するということが大事です。ルールを作りすぎないということも重要かと思います。最初はちょっと苦労するけど、それから皆でやっていこうということですね、覚悟を決めて最初の苦労を乗り越える。これも大事かと思います。これは道教委が既になさっておりますけれども（ICT活用授業モデルTips編）、小さな成功事例を共有する。これは非常に重要です。道教委サイトには、もう400を超えるアイデアが集まっていると伺っておりますが、素晴らしいと思います。

これ（資料26ページ）は、私の学校で行った環境整備です。このようにICT機器が教室に「常設」されているだけではなく、「固定」されているということが重要です。予算としては1～2万円程度増やさないと用意できません。この環境整備がされていると、例えば、辞書の使い方（を教えること）も、このように（資料27ページ）あっという間にできるわけです。こうすると先生方は使ってくれます。決して、日本の先生がICTに弱いわけではないと私は思います。環境整備によって使いやすくなれば先生達は使うのです。

例えば、これは（資料28ページ）1年生のノート指導です。1年生にノートの書き方を教えるのは大変なのですけれど、こういうものが用意されていれば、簡単にできるということです。

最後になりますが、忘れてはいけないこと（資料29ページ）をまとめました。すべてICTだけになるわけではなく、この写真にもあるとおり、ノートも使いますし、その書き方も教えなければなりません。ハイブリッドです。それからICT時代の危機管理ということで、ネットモラルの指導、それから先生方にとってはセキュリティ体制の指導、これも重要になります。それから、ICT時代の健康管理ということで、例えば、依存的な利用にならないような指導も大事です。何より先生達が、まず慣れる。そして、日常的な使用をすることで、子ども達の日常改善に繋がってくるのかなというふうに思います。

これは（資料30ページ）、最初にお見せしたものと同じです。学校で、日常的に使われる状態を何とか皆で応援して、実現していきたいなと思っております。ご清聴ありがとうございました。

○鈴木知事

新保理事長ありがとうございました。それでは、ここからは意見交換に入らせていただきたいと思います。教育委員の皆様から、ご意見ですとか、新保理事長のご講演に対するご質問など、ご発言をいただければと思っております。最初に、山本委員から、よろしくお願い申し上げます。

○山本委員

はい、山本です。新保先生どうもありがとうございました。学校の取組状況ですとか、或いは今後の方向性がとてもよく理解できました。本当にありがとうございました。私も学校に勤務しておりましたので、近年、学校に期待され、求められることも多くなって、それに伴う、先生方の業務量も増加していると感じておりました。現在は更に、感染症対策という非常に神経の使う業務も加わっている状況なのかなと思っております。ただこのような中でも、先生方の懸命な取組によって、子ども達の学力水準を維持して、社会性などを着実に育んでいるのだと思っております。

文部科学省の来年度の予算案では35人学級の整備が示されましたが、学校を支えるマンパワーの一層の充実が必要だと私は考えます。新保先生のお話をお聞きし、北海道という地域性や人口減少が進む中、そしてコロナ禍の状況で評価の高いこれまでの教育の維持は可能なのかという切実な課題が突きつけられているような気がいたしました。先週の新聞報道で「小中学生の生活コロナで乱れ。新型コロナウイルスの感染症感染拡大に伴う一斉休校も影響。」と道教委の分析も出ておりました。学校の果たす役割の大きさを感じましたし、そして学校が学力を保障するといった役割はもちろんですけれども、人格の完成といった教育の目標の達成を目指して、他者と安全安心に繋がることのできる居場所、そして心身の健康を保障するといった役割を担っていることも改めて確認させていただいたところであります。

臨時休業中にはまずできるところからということで、各学校で様々な対応が見られましたが、やはりこの間の学校や家庭の一番のニードは、双方向のオンラインでの繋がりではなかったのかなと思います。国のGIGAスクール構想の前倒しでICT環境の整備が加速されていますけれども、今後の社会のあり方、広大な北海道の地域性を考える時、私も実は書道の遠隔授業を参観したりですとか、或いは急速に広がったZoomによる研修も経験しましたけれども、遠隔の授業や遠隔での研修はもとより、日常の学びの充実のためにICTを活用するとともに、非日常すなわち災害や感染症で登校できない状況でのオンラインでの繋がりが学びの保障となり、先ほど申し上げました学力保障や居場所、心身の健康等、様々な役割を持つ学校の機能維持に繋がるものと考えます。

ICTは個別最適なツールとして更なる教育の向上に繋がることが期待される一方、教育の個別化が進むと、子どもの関心、意欲、態度、そしてそれを支える家庭環境が学力差に繋がり、拡大してくことが懸念されるとの指摘もありますので、子ども達一人一人の特性に応じた、或いは理解度に応じたきめ細かい指導が一層求められるのではないかなと思います。

最後になります。いつの時代も子どもは社会の宝ですけれども、少子超高齢社会の日本、そして北海道では、これからの社会を担う子どもは、どこの国よりも大切な存在になっていると思います。その将来を担う子ども達、まさに未来からの留学生が現在それぞれの地域、学校で学んでおりまして、未来を生き抜く心身共にタフな若者を育てて送り出す使命が私たち大人にはあるのだと思います。待ったなしの変革の時代ですので、学校、教育委員会、北海道が一丸となった取組を進めていかなければならないと思います。以上です。

○鈴木知事

はい。山本委員ありがとうございました。それでは次に青山委員お願いいたします。

〇青山委員

はい。ご講演大変ありがとうございました。講演を聞いて子ども達にもっと北海道のことを知って欲しいなと思いました。現在、私も北海道にあります大学で講師をしています。留学やホームステイに行った学生から、「先生、ホストマザーとか友達から北海道ってどんな町なのとたくさん聞かれたけれども、きちんと答えられなかった。自分が住んでいる町なのに何も知らないことにすごくショックだった。」とそんな話を聞きました。ですので、北海道の魅力をたくさん感じられるという教育は、保護者としてもとても楽しみです。また、ICTを特別なものとして扱わないということ、まず使ってみるということも非常に良いなと思いました。カバーをかけないで使って欲しいなと思います。

現在、私には小学校3年生と5年生の子どもがおります。新型コロナウイルスの感染症の対策が始まってから、2カ月を超える休校、自宅での勉強、学校の再開でマスクの着用と体温計の計測チェックカードの記入、それから水筒の用意と本当に目まぐるしい環境の変化がありまして、保護者としても様々な対応に追われた1年だったなと思います。子ども達も慣れない休校や活動の自粛、企業見学の学習をはじめ運動会、劇、音楽の会の中止、給食の私語禁止、アクティブラーニングの自粛といった、友達との関わりの減少で強いストレスにさらされているのではないかなと思います。

GIGAスクール構想の前倒しによるパソコンの授業の導入は、準備をしていなかったこともあって、プログラミングの授業に備えるべく準備をしていたので、想像を超えるスピードでパソコンとかタブレットの授業導入ということで、不安とか戸惑いも実はありました。子ども達にはタブレットを持たせて使わせているのですけども、パソコンも用意しなければならないのだなと思っています。

現在進められている授業の様子や学級閉鎖などになった場合の対策など、先ほどの説明の中で確認できたので、これからの学びの変化を落ち着いて見守りたいなと思っています。一つ危惧していることは、デジタル機器を使用する時間が増えることによって、子どもの視力の低下とか、うちの息子は、ゲームを長時間させると、土曜日と日曜日しかさせていないのですが、頭が痛いというので、実は精密検査を受けたら肩こりだったのです。「あぁ、ゲームによる肩こり、小学校なのに肩こるのだ」と思ってびっくりして、何か頭がおかしくなってしまったのかなと思って検査をしたらそのようなこともあったので、その視力の低下だけではなく、心身の健康に悪い影響が及ぶことがないように、そのようなことも対策にあったらいいなと思っています。

ただ、新しい学びのスタイルは、本当に必要ですし、時代の変化に合わせた学びを求められていると思いますので、保護者も理解して合わせていかなければいけないなと、そんなふうに思いました。以上です。ご講演本当にありがとうございます。

〇鈴木知事

青山委員、ありがとうございました。それでは次に、渡辺委員よろしくお願いいたします。

〇渡辺委員

新保先生、大変貴重なご講演をありがとうございました。長らく未来のことと思っていた将来の

学校の在り方が、現実に実行可能で、既に優れた取組が進んできていることがよくわかりました。

私は小児科の医師ですので、医療の立場から感想を述べさせていただきたいと思います。今現在、新型コロナウイルスの流行下にありますが、ここ20年ほどで新しい感染症は約10年おきに出現していました。先生のご講演にもございましたが、2012年の中東呼吸器症候群、2003年にはSARS。新型インフルエンザで病院に行列ができたのは2009年だったと思いますけれどもそういったこともございました。気候変動や森林の開発が進むと、この先も新興感染症の出現があるだろうと専門家は予測しておりますので、そのような中で、ICT化によって教育を継続していける「体力」といったものが養われるのは大変現実的でかつ安心感のあることと存じます。

電子メディアを使用した場合に、健康に対して弊害が指摘されることが多いと思います。先ほど青山委員からのお話もありましたけれども、例えば目の酷使、視力に対する影響、姿勢が乱れること、例えば頭痛や肩こりなどは小学校の低学年でも発生していると思います。実際に私も小児科の診療をしていく中で非常によく出会います。ご講演にもございましたが、限られた画面に集中するゲームの使用が多いからでしょうか。文房具のように使うということならば心配はないのかなと思っておりますが、授業でこういったものを活用するということで、教員、児童または生徒のみなさんの心身にどのようなことが起こり得るのかまだわからないことも多いと存じますが、ICTの利用と並行して、そのような分野の研究を進めて、得た知見から考案した予防策を授業のプログラムにそっと差し込んでいくといったような考え方が私は望ましく思います。例えば長時間画面を見ざるを得ない授業ならば、2時間目には体育などを入れていくといったことや、あるいは20分くらいで視線を変えていけるようにそもそも授業を設定していく、そういったことを教員の先生方にご提案していくというのはいかがでしょうか。つまり、ICTのプログラムを健康の側面からケアしながら形作っていく、そういう考え方を持っていただければ良いなと思っています。教室の座席もひょっとしたら固定する必要はなくなるかもしれませんし、座席に座りっぱなしだと、昔私たちもお尻が痛かったと思うのですよね。ランドセルも小さくなって、負担が減るといいですね。こういったICT化によって、現在よりも子ども達の健康に寄与していくやり方が実現できたら素晴らしいことと存じます。

携帯電話やスマートフォンはすごい早さで社会に浸透したと思いますけれども、これは便利や効率を重んじた結果だと思いますので、教育分野においては、そういったことを進める基軸として、もう一つ「心身の健康」の理念を始めから実装していけば、現場への導入もスムーズになるのではないかと考えます。

療育の分野にも既にご提案があったと思いますが、社会的活動がしやすくなるツールを学習することで、これまで目立たなかった能力が開花することは大いにあり得ることと存じます。これは非常に期待しているところです。個々の状況に応じた対応と、その裾野が広がることを期待したいと思います。ありがとうございました。

○鈴木知事

渡辺委員ありがとうございました。それでは次に川端委員お願いいたします。

〇川端委員

はい、皆さんこんにちは。冒頭に私の母校に写真が飾ってあると言っていただきまして、さらに40年前通っていた子どもには考えられないITを使った授業をここはやっていたのだなということにまずびっくりしました。新保先生、お話ありがとうございました。

お話を聞いていて一番私が同感したことというのは、ほっかいどう学の必要性ということです。これは、スポーツ選手をしてきた中で、「世界の中で胸を張って立っていられるには何か」と考える中で、競技力もさることながら、アイデンティティが自分を司り、なによりも大切なものであると知り、その重要性を強く感じているからです。「どこからきたの」と聞かれた際、日本の〇〇からと答えますが、「日本のどこにあるかわからないけど知っている」と言われた時の安堵感や誇らしさは格別な思いとなり、その後の会話、行動に自信をくれます。

先ほど青山委員がお話していたように、日本人、道産子、自分の住んでいる町やその場所のことを知らないと諸外国の人に説明も出来ない。出来ないことで、次の行動にも自信がなくなるということになります。故に私はやはり道内のことをいろいろ自分で学ぼうとしましたし、自分の町をいかに良いように表現をできるかということを感じてきました。

今現実子ども達は、道内は広いですから行きたくても行けませんが、このICTというものを活用すると、ちょっと隣の町、国までというのを簡単に見に行くことが出来ます。まずそういうICTを使った中で知らない地域などを学び、自分の町の良いところ、変わって欲しいところなどを考えたりしながら、より北海道愛や地元愛を産んで自分のバックボーンを作っていける一つなのではないかなと思っています。ぜひこのICTを使って、見に行けない知床の自然遺産に行ったりとか、そういうことをしつつ、移動が可能になった時に「生で見て」ICTで得た知識を活用できたらいいのではないかなと非常に思いました。

また海外の学校との違いですね。やはり、私自身も海外の学校に行っていましたので、スポーツという分野で言うと、学校体育とは別に専門化されていて、地域のクラブ制度であったり、大きな違いを感じています。そういう意味では、やはり、部活動の中にも先生だけではなく、専門知識を持った方の活用を考えていけたら良いかと思います。ちなみに道内には、オリンピアン、パラリンピアンがすでに500人ほどいます。そういう人が全道各地におりますので、ICTを使って子ども達がその種目のいろいろな特性について学んでいくということも簡単にできるようになる時代になったらいいなと願っています。

ただ、スポーツは、情報分析はできるのですが、実際に体を動かすということは、ICTの中では出来ませんので、ICTで何を見て、何を学ぶ、そして実際に動く。先ほど渡辺先生がおっしゃっていたような動かない子どもになってしまっては困るということを考えると、何かそういうソフトで1日これだけ動いたのが、ここに渡されたパット内で運動した量が、パットを使える時間になるというようなソフトがあったら、現実的に体を動かすのと、ICTが結びついていくのかなと思って見ておりました。

私達は、私自身も外を見て初めて知ったのですが、海が山の上から見えて、自分の国土を見られる、地図がそのまま目に入るという国は、ほぼ他の国にはありません。でも北海道はそれができるのです。海のものもあって山にも近くに行けて、その環境の良さを、始めは氷河がある海外でスキー

が一年中できることだけに目を奪われ、隣の芝が青く見えていました。でも戻ってきてみたら何と自分の町が素晴らしかったのかというのを感じ、更なる地元愛になりました。また、これは日本人特有なのですが、国境というものを私たちは知りません。島を出たら他国ですから、そういう環境も違います。でもその違いを活かすことも、そのICTを使うことによってたくさん学ぶことができるのではないかなと私自身は考えました。

また、現在オーストラリアとのいろいろなコミュニケーションを取ろうということで提携を道教委では結んでおりますので、しばらくの間は海外の人とICTを使ってコミュニケーションを取りながら、いろいろな地域発信をしていくことができるとすごく良いなと思っております。

最後に、やはりICTと紙と鉛筆の両方が必要だというお話がありましたが、実はこの冬休みに、娘にキーボードを打つ練習をするためにタブレットにキーボードを付けて絵日記を書かせたのですね。せっかく英語も授業になりましたので、曜日と日付を英語で書かせていたのですが、一つ私も考えが浅はかでした。なんと、何回も押していると勝手に下にいくつか選択肢が出てきて、2週目になるとTuesdayも全部書かなくても出てきてしまうという誤算がありまして、これは私達自身もそうですけれども、漢字が読めるけど書けなくなってきていますよねパソコンを使っていると。その現実を考えると、やはりノートと鉛筆で書かせるもの、反復するものと、活用するものを私自身ももう少し考えておけばよかったなという反省をこの冬休みに持ちながら過ごしました。

これからの子ども達は新しいこのICTと共に、新しい生活スタイルを目指していくと思いますが、スポーツをする子ども達は今、いろいろな局面におります。特に学校外で活動しなくてはいけない冬季スポーツの選手たちは、大きい大会が中止になってしまったり、活動拠点が閉鎖になったりということで苦戦をしております。その子ども達にも何か元気づけてあげられるような、いろいろな学びを続けていけるように頑張っていけたらなと思っております。今日はありがとうございました。

○鈴木知事

川端委員ありがとうございました。それでは、橋場委員お願いいたします。

○橋場委員

新保元康先生、GIGAスクール構想に関する大変分かりやすいご説明をいただき、どうもありがとうございました。

私ども北海道教育委員会は、鈴木知事の要請を受けて公立小中学校及び道立高等学校の一斉休校を決断しました。1回目は、小中学校は2月27日から3月4日で、札幌市教育委員会も2月28日から一斉休校としました。政府の要請がこれに続き、3月2日から春休みに入るまで全国の学校が一斉休校となりました。4月6日には全道の学校が再開となったものの、札幌市内や近郊の学校が再び休校となり、道教委の要請で4月20日から全道で学校が再休校となりました。全道で学校が再開したのは、6月1日でした。

児童、生徒たちの学びの保障について、私たちは真剣に考えていました。5名の教育委員も各地の新聞報道などを集め認識を共通化するため、仕事が一段落した午後7時頃からZoomを使って

の臨時ミーティングを行っていました。道教委の職員も休日返上での対応に追われておりました。夜遅くのメールも珍しくありませんでした。4月4日の未明、遠隔教育を促進していた佐藤嘉大教育長が急逝するという悲しい出来事が起きました。学びの継続・保障を一番に願っておられた道教委トップとの早すぎるお別れでした。4月28日、小玉俊宏現教育長が就任されました。

時代が動いていると感じたのは、昨年（令和2年）5月11日にネット配信された文部科学省による学校の情報環境設備に関する説明会でした。衝撃的だったのは、髙谷浩樹課長による「GIGAスクール構想の実現」という令和2年度補正予算概要説明でした。この中で髙谷課長は、「今は前代未聞の非常時・緊急時なのに危機感がない。ICT、オンライン学習は学びの保障に大いに役立つのに取り組もうとしていない。」などと公に発言し、教育関係のICT環境の整備が遅れていることを全国に発信しました。「えっ、この非常時にさえICTを使わないのはなぜ？使わない地方自治体には説明責任が生じる！」とまで言い切り、以下の点を強調しました。

・使えるものは何でも使って……家庭のパソコン、家族のスマホ

・できることから、できる人から……「一律にやる」必要はない

・既存のルールにとらわれずに臨機応変に……「ルールを守ること」が目的ではない。

・何でも取り組んでみる。……現場の教員の取組をつぶさない。

道教委は、小玉教育長着任2週間後の5月14日にCovid-19に係る「リモート学習応急対応マニュアル」を教育現場に配布しました。道教育委員会を構成する教育長と5名の教育委員も、いち早く遠隔・リモートによるコミュニケーションを実体験しようと、6月5日に小玉教育長とのZoom会議、8月21日には関係課長補佐とのZoom会議を、同月26日は全道の教育委員会を対象とした「みんなの教育委員会」をZoomで遠隔会議を開催し、「学校教育における学びの保障」をテーマに情報交換を行いました。もちろん、対面での教育委員会会議でも熱い議論が交換されており、子どもの学びの保障の継続的実現に関して積極的かつ真剣に取り組んでまいりました。GIGAスクール構想は、Withコロナ、Afterコロナの時代にも児童、生徒の力になります。

新保先生のパワーポイント資料の19～20ページのとおり、不登校等への対応、病気等による長期欠席を余儀なくされている児童生徒への対応、災害、インフルエンザや悪天候による休校時の学びの継続保障、教職員の遠隔研修による効率化など、その可能性は大きいものです。そのためには、パワーポイント資料の13ページと25ページの大容量高速ネットワークとクラウドの利用が不可欠です。鈴木知事にお願いです。前者については、これから更なる予算付けを、後者については遠隔リモート授業に限定してでも良いですので、北海道のインターネットセキュリティルールの緩和的な見直しを是非とも実現していただきたく、政策の主要課題としてください。

最後に、新保先生に1つだけ質問です。パワーポイント資料の19ページ等にある「授業準備等の負担軽減」についてもう少し具体的なイメージを教えてください。

○鈴木知事

はい。橋場委員ありがとうございました。各委員の皆様から様々なご発言をいただきましたけれども、新保理事長からコメントをいただければありがたいと思います。

〇新保理事長

はい。大変貴重なご意見をいただきまして嬉しく思いました。

山本委員のお話では、やはり日本の教育の素晴らしさ、つまり教科だけではなく人格を育てるという学校の良さが、このコロナ禍で学校に行けないことによってより良く感じられたということですね。これは私も本当にそう思います。これが日本の学校なのだなと。子どもと学校をいつでも繋ぐ道具の一つとしてITがこれから入ってくるのかなということも感じました。

それから青山委員のお話を伺いまして、留学先でホストファミリーなどに自分の生まれ育った北海道のことを説明できなかったというお話は、とてもよくある話です。子どもたちが、自分たちの北海道の良さを説明できるようにしたいです。外国語の学習も始まっていますけれど、中身が大事だと私は思っています。「北海道ってこんなところだよ」と自信満々に語れるようになって欲しいなと思います。

それから渡辺委員のお話からは、やはり健康面のことは本当に大事なことだなと改めて思いました。目のこともそうです。その中で、委員のおっしゃった中に、「文房具のように使うのであれば心配ないのかも」というようなお話もありました。私も聞いたところによりますと、ゲームをする時は子どもの集中力が半端でないそうです。それに比べますと授業で見ている時には、それほどの集中力でもないのではないかというお話もございます。授業の時には、いろいろなものを使いながらやりますし、やはり隣の子どものことも気にしながらやりますので、それが良いのかなと。徐々に良い使い方、それからここは気をつけようというのは明らかになってくるのかなと思いました。

それから川端委員のお話、本当に興味深く伺いました。やはり、世界を知っている方のお話は違うのだなと思いました。我が国のこと、そして北海道の魅力。私は、航空写真家でお亡くなりになった清水武男さんに「北海道は空から写すと世界で一番色のある美しい島なのだよ。」と教えられたことがあります。この北海道にいるというアイデンティティ、北海道人であるというアイデンティティを育てていくこと、これをICTも使って行うことが大事かなというふうに思いました。

そして、最後に橋場委員からご質問もいただきました。先生方の負担軽減にどう繋がるかというお訊ねでした。例えば、デジタル教材というのは、一度作りますとそれを何度もみんなで共有することが可能になります。模造紙で作った教材は壊れていきます。それから1回書き込みますと次は使えません。ところがデジタルのものであれば、私が作ったものを他の先生にも使ってもらえます。実はNPOほっかいどう学でも、そういう北海道に関係する教材を提供できたらなと思っております。それから先ほど少しお見せしたような環境整備がされていれば、先生が教材をコピーして持っていかなくても、みんなに見せたいものをすぐに大きくできるようになります。こうして先生方の負担軽減にもなるのかなと思っています。本当に皆さんありがとうございました。

〇鈴木知事

新保理事長ありがとうございました。それでは小玉教育長からも、発言をお願いいたします。

○小玉教育長

はい、小玉でございます。新保先生、各委員の皆さん、ありがとうございました。非常に参考になりました。コロナという逆境、非常時が、いろいろな、様々な改革の先延ばしを阻んで一挙に物事が進んでいるなというふうに感じております。私も最初はコロナ禍で、広域分散型の北海道にとってはハンディを埋める素晴らしいシステムだなというふうに思ったのですが、実際に見ますとそれだけではなくて、思考のスタイル自体を変える。それから個別の学びの最適化ということもあるのですが、他者との関係性もより深めるという非常にそういう革新的なスタイルに変わっていくのだというふうに感じております。そしてSociety5.0というのが今日のテーマですが、Society4.0と5.0ってどう違うのだろうかということを、2、3年前から考えておりました。情報化が進むSociety4.0すなわち、情報社会については、私も40年ぐらい前からITを使って作業を効率化するというスタンスで関わってきたけれども、やはりアナログ作業のままOA化するというようなことが中心だったものですから、どうしてもストレスが高くて、使い勝手がいまいちかなというようなものが多かったかと思います。しかし5.0の時代になりますと、高速大容量通信、AIですとか、ビッグデータ、RPAといった、全く今までとは別次元のソリューション、つまり課題解決の方策を提示してくれます。これは教育の世界に置き換えますと、あらかじめ正解が決まっていて、それを早く便利に解決しようという考え方ではなくて、新しい技術、なんだこりゃというようなものから、学びや働き方の新しい価値を発想しようというものに変わろうとしている、そういった兆しを感じております。この半年でかなりハードは充実したかと思いますが、それを使いこなそうというメンタリティのほうは、まだまだだと思っておりますので、まずは、考えるよりも先に使ってみる、慣れてみるというようなアクションを起こしていただくように学校現場のほうにも私、強く訴えていきたいと思います。また教育と行政部局である教育局、振興局、それから市町村の首長部局、教育委員会、こういった横断的な取組を進める上でも一つの要になるようなツールになると思いますので、そういった連携についても強化していくように進めていきたいと思います。今日はありがとうございました。

○鈴木知事

小玉教育長ありがとうございました。それでは私からもコメントしたいと思います。まずは、本日、こういった形で、WEBで北海道総合教育会議が開催することができたことに心から皆様に感謝申し上げます。子ども達に様々な環境への挑戦を求めている中で、教育の今後の大きな方針を決めていくこの会議もこういった形でWEB開催を初めてやったということですので、そのことが一歩大きく踏み出せたということで感謝申し上げます。そして、新保理事長をはじめ、教育委員の皆様からそれぞれ、今回のGIGAスクールのみならず、このコロナ禍における、様々お感じになられていることも率直にお話をいただきました。あらためて感謝申し上げたいと思います。

この北海道Society5.0構想でございますけれども、私も知事に就任しまして、コロナがここまで感染拡大をする前に、先ほど新保理事長からもお話がございましたが、北海道がやはり広域分散で、非常にそういう意味では、環境上厳しい側面があることを、新しい技術で解決をしていくことこそ、北海道に必要だということで、Society5.0の北海道版を作ろうということで取組を進めていた

中において、こういったGIGAスクールの前倒しや、新型コロナウイルスの感染拡大がありました。ですので、こういった非常に厳しい課題を突きつけられているわけでございますけれども、今日、各委員の皆様のお話をお伺いいたしますと、こういった様々な課題に対して、むしろここは、しっかりと前向きにも捉えつつ、いかにしてこの環境を良いものに変えていけるのかというのが大人の責任でもあるのだという中で、様々なご意見をいただいたと思っています。

また、同時に、GIGAスクール構想、またそれに関連する対策全てがバラ色な世界ではなくて、それをどう使うか、また使っていく中で、先ほどお話ございました健康上のお話もそうですけれども、ゲームに集中して肩こりや頭痛があるという話でしたけれども、子ども達が今度は勉強に集中しすぎて、頭が痛くなったり、肩が凝ってしまうということになってくるかもしれませんが、どういった形で、子ども達が楽しみながら新しい環境で、健康と並行しながら、学校の中で学んでいけるかということも重要なポイントなのだと思っております。

また、今日、新保理事長からお話をいただいた中で、ほっかいどう学については、時間の限りがあったのであまり集中的なお話はありませんでしたけれども、そこに対する印象を、皆さん、各委員が強く持たれて、やはり子ども達が北海道の素晴らしさを語れることが極めて重要だという観点や、また世界との交流ができていない中で、新しい技術を使ってそういった交流の中で、北海道の素晴らしさを発信できるような子ども達が増えてほしいということで川端委員からもお話ございましたが、そういったことにも繋がっていく話だなと思いました。

これは教育だけの話ではないのですけれども、日本全体での大都市一極集中の是正ということが叫ばれてきて、なかなか大きな動きまでは生み出せなかった今日に、このコロナ禍で都市一極集中、特に首都圏での感染症の課題などが顕在化して、自然豊かな北海道に対する魅力や、その価値に改めて気づいてくださった方々も多いのではないかと思っているところでございます。

教育を充実していくことは、地域創生にも大きく繋がる、また、子育て世代が北海道で生活をしていく上で、やはり本道が他の地域と比較した時に、大きな可能性を秘めていることをしっかりお知らせをしていく、ある意味ではチャンスにもなると思っております。

今日いただきました様々なご意見等も踏まえまして、このWithコロナ時代の学びの保障や、様々な課題について、いかにしてハード・ソフト両面から充実をさせていくのかという観点、また、地域創生を支える、そういった「ほっかいどう学」、北海道を語れる、そういった子ども達をしっかり育てていくために、これからも、各教育委員の皆様から様々なご意見やご提案を賜れればと思っているところでございます。

この第1回目となりましたWEBでの総合教育会議でございますけれども、時間を大幅に超過して、皆様から様々なご意見をいただきました。このことに心から感謝申し上げますとともに、また本日ご講演いただきました新保理事長に重ねて感謝申し上げまして、令和2年度第1回北海道総合教育会議を終了させていただきたいと思います。どうか皆さん、今後ともよろしくお願い申し上げます。ありがとうございます。

（了）